

漢法苞徳塾資料	No. 225
区分	診断論・脈診
タイトル	難経脈学の要点
著者	八木素萌
作成日	

「独り寸口ヲ取りテ 以テ五臓六腑ノ死生吉凶ヲ決スルノ法」と脈診を論じている1難に対して、16難では「假令えば腎脈を得ては 其の外証は 面黒く 善く恐れ 欠す 其の内証は 齊の下に動気) 有り 之れを按ずれば牢にして若も痛む 其の病たるや 逆気し 小腹急痛し 泄して下重し 足脛寒えて而かも 逆す是れ有るものは腎なり 是れ無き者ものは非なり」と言うように五臓の全部について、脈が腎の病を指示していても、外証や腹証や病症が腎の病であることを示すものであれば腎病と診ても良いが、外証や腹証や病症が腎の病を意味するものでは無いならば腎病と診てはいけないのだと、明瞭に記述している。81難では補瀉の決定に際しては、脈に従うのでは無く病症そのものの虚実に基づいて決定すべきである事を、極めて明瞭に記述している。

条文の解釈によっては字数の計算に相違があり得るが、脈論の字数は6000字弱（5000字強と数える事もある）であるが、六部定位脈法の根拠と言われる記述は、18難前段の118字に渉る記述である。中段の73字の記述を、これに加算しても191字の記述であり、脈論全体の記述量の5%にも満たない記述量である。この事実からしても、191字の記述をもって難経脈論の核心部分と見なすことが乱暴で非学問的な見解であるのは明らかな事である。難経の記述の特長として三陰三陽の名義を用いる場合は、季節の陰陽の消長を表現する時と、経脈に限定して表現する時のみである。故に18難前段の記述は脈診部への経脈配当の記述が主たるものであると言える。

1難の様に脈で病の吉凶を判断出来るというのは如何なる事であるかが問題である。8難（101字）、13難（245字）、16難（311字）、17難（163字）、19難（141字）その他の記述から、病証と脈証の関係によって判定できるからであるのは明らかである。